

写真展に約400人—いろいろな感想を頂きました—

再処理やウラン鉱山の汚染、下請け被曝労働者と知らないことばかり、 国や電力会社は国民に知らせるべきだ、やはり原発はなくさなくてはならない

越前市 山崎隆敏

6月19・20日に福井市でアジア・太平洋経済協力機構(APEC)のエネルギー担当大臣会議が開催されました。私たちは、それに対抗して、原子力の平和利用がもたらしている核汚染・被曝の現実を県民に知ってもらうため、5月25～31日まで福井市の駅裏にある市の施設アオッサで、6月1～9日は越前市中央図書館のエントランスのロビーで4人のフォトジャーナリストの写真を展示しました。写真の内容は以下のとおりです。

樋口健二さんの作品

日本でも原発の内部で除染などの仕事をする約40万人の「被曝労働者」の存在があります。

森住 卓さんの写真

“ブッダ生誕の地”インドの先住民が住む地域にウラン鉱山がありウランを採掘・製錬する公社の近隣の住民の間にガン、白血病、流産・死産、奇形、先天異常、皮膚疾患など深刻な病気が広がっています。

伊藤孝司さんの作品

オーストラリアの鉱山も先住民の居留地にあります。豊かな自然の中で平和に暮らしていた先住民が鉱山労働者として従事し被曝しました。鉱滓置き場の近くの住民の間でもガンや障害が多発しています。

小林晃さんの作品

日本の使用済み燃料を再処理している仏国と英国の工場と周辺住民の写真です。工場周辺では、子どもの白血病などの疾病率が高いと報告され、それを両国政府とも認めています。英・仏の再処理工場による海洋汚染は北海まで広がり、隣国のノルウェー政府は英国に操業中止を何度も勧告しています。

これら海外の被害について、私たち日本人にも大きな責任があります。もし私たち日本人が人権を尊ぶ国の国民だというのなら、これらの人権侵害の責任についても自らを問わなければなりません。この人権侵害の惨状を知った上で、原発をこのまま続けるのか、それとも脱原発を目指すのか、と問われれば、脱原発は当然の帰結となるはずです。

滋賀県の友人が会場の近くに一週間宿を取り、手弁当で写真展の受付をしてくれました。新聞やハガキ、メール

などの呼びかけで来た人よりも、通りがけに見ていった人の数のほうが圧倒的に多くありました。友人が、一人ひとりにチラシを配ってくれたので、約400人が観てくれたことが分かりました。再処理やウラン鉱山の汚染、下請け被曝労働者の存在も知らないことばかり、こんな問題があることも国や電力会社は国民に知らせるべきだ、やはり原発はなくさなくてはならない、という感想が多くありました。

越前市の図書館では、受け付けに張り付くことはできなかったのですが、図書館司書が、多くの人が熱心に観ていったと感激していました。

映画上映会の場合は、事前にあらゆるつてを頼ってチケットを売りさばく必要があります。そのため上映会を何度か繰り返すと、地域の中での交流関係が煮詰まってきて、いつも同じような参観者の顔ぶれとならざるをえません。しかし、写真展の場合は、私たちが情報を本当に伝えたい相手であるところの、普通ならめぐり合う機会も無い広範な人々との出会いの場が開けるとい側面があります。マスコミ(テレビも)もAPECの開催期間ということもあったせいか、各紙とも詳しく報じてくれました。この記事で読者は、原発と核汚染は切り離せないものという、これまで知らなかった情報を得られたことでしょう。もっとも、今回のように会場費は只でも、入場料をとることができなかったため(多少のカンパはありましたが)、写真展でははじめから経費に見合う収入は見込めないという難点もあります。ただ、チケット販売の困難さを考えると、写真展は、これからも開催を検討する価値はあると思います。



(原発内で働く労働者)

『世界のヒバクシャ』講演会

5月29日には、写真展の会場で、広島・長崎原爆の健康被害やチェルノブイリ被害者の救援活動など、ヒバクの

問題と長く取り組んでこられた振津かつみ医師のお話を聞きました。振津先生は、今春にも、アメリカのウラン鉱山の被害住民を訪ねておられます。ベラルーシの人たちとこれまで何度も福井に来られていますが、きちんと講演をしていただくのは今回が初めてのことでした。福井では原発問題で一般市民の参加は多くは望めないのですが、この日は約30名の県民(顔見知りは数人だけ)が参加し、熱心に質問や意見を述べられました。

最後に簡単ですが会計報告です。4人の写真家からお借りした写真の代金は、それぞれ単価は異なりますが、合計で約11万円でした。それに往復運賃やパネル賃料などの経費を入れると、総計で14万円かかりました。皆さんからいただいた若狭ネットのカンパを使わせていただきました。改めて御礼を申し上げます。

メニユエル・ピノ氏 (米国先住民活動家・社会学教授) のお話しを 聞く集い

日 時： 8月1日(日) 午後2時30分～5時30分

会 場： 鯖江市文化の館(図書館)

入場料： 無料(カンパ歓迎)

主 催： 子どもたちに未来をつなぐ会 山崎隆敏(Tel.42-3630)



メニユエル・ピノ氏の活動歴

ピノ氏はニューメキシコ州の先住民プエブロのアコマ族の出身(1950年生まれ)。

生まれ育った地域(アコマ族とプエブロ族の「居留区」)には、世界最大と言われた露天掘りの「ジャックパイル・ウラン鉱山」がある(1953-1982年、操業)。同鉱山での1970年代の採掘量は、米国のウランの25%、全世界の11%を占めていた。

ピノ氏は、1970年代後半から「全米インディアン青年会議」の活動家として、ナバホ族居住地の石炭開発の環境破壊問題などに取り組んでいた。その中で、自分の出身地で行われてきたウラン採掘の問題を知り、それ以来30年にわたって、ウラン採掘反対の活動に取り組むと同時に、採掘による環境と先住民への健康、社会生活、文化など、様々な形で被害の調査研究にも携わっている。2001年の「反差別国連世界会議」には、先住民代表として参加。2008年には、他の先住民活動家とともに「核のない未来賞」(Nuclear Free Future Award)を受賞。

現在は、スコッツデール・コミュニティ大学(アリゾナ州)の社会学教授、アメリカ・インディアン研究課の責任者を務めている。また、「先住民環境ネットワーク」、「安全な環境を求めるアコマ・ラグーナ連合」、「南西部調査情報センター」などの評議委員長としても活動している。

先住民の命、「母なる大地」を犠牲にして行われたウラン採掘

ウラン鉱山や原子力施設のある他の多くの地域で、先住民が同じような被害あっている。たとえばワシントン州のスポーケーンでは、スポーケーン川は、一見とてもきれいに見えるが放射能汚染がひどい。この川の側には、世界でも有数の核廃棄物貯蔵地であるハンフォード核施設があり、そこから漏出した放射能で川が汚染されたのだ。川ではサケを捕まえて食べることはもうできないと言われている。しかし、そこの先住民にとっては、サケは伝統的な食料。サケによって、人々は月日の移り変わりを知り、それは大地の移り変わりを知る「心のカレンダー」のようなもの。自分たちが獲った魚で、がんになっているにもかかわらず、人々は魚を捕り続けている。

人々の伝統的な生活を変えることはできない。このようにして私たちは暮らしてきたし、今後もそのような生活を続けようとしている。

核廃棄物処分地として狙われている先住民の土地

原発から出る廃棄物は、未だに安全に保管する方法が見つかっていない。1980年代からヤッカマウンティンが高レベル廃棄物の処分地として狙われていた。ヤッカマウンティンは、昔からウエストショショーニの土地で、彼らはまたしても先住民の土地を狙った。オバマ大統領はその計画をやめる方針だが、政府は依然として「核エネルギーは再生可能なエネルギー」と言っている。廃棄物処分すら解決できていないのに、「再生可能エネルギー」というのは、私は全く理解できない。

「核燃料の鎖」は、ウラン採掘からはじまって廃棄物処理まで、先住民の土地に被害が押し付けられてきた。ゴーシュート族の土地では、低レベル廃棄物処分場を引き受けた。1980年代から、様々な部族が廃棄物処分場として狙われている。

解決策は「空や風」

「どうやったら解決できるのか」私たちは自問しなければならない。解決策は「空や風」にある。

雨の少ないこの地域での日照が年間何日あるか、考えて見てほしい。インディアン・ヘルスサービスの病院では、太陽光発電をかなり昔から利用している。私たち先住民の土地では、このような本当の意味での「再生可能」エネルギー産業を率先して行ってゆくことができると思う。コミュニティのリーダー達は、「そのような新しい産業は経済的リスクがある」と言う。しかし1940年代末に、私たちは、喜んで石油エネルギーを燃やし、また原発にウランを供給するような、当時では新しかったこれらの産業を受け入れたのではないか。その結果、多くのウラン鉱山労働者が病気になり亡くなって行く事になるとは、当時はだれも知らなかった。

[2009年10月／第7回 「先住民ウランフォーラム」ニューメキシコ州でのピノ氏の報告から抜粋]訳：振津

本の紹介

7月に、私の新刊本『福井の山と川と海と原発』(八月書館)ができました。

『福井の月の輪熊と原発』と『福井のイヌワシと原発』を書いてから約20年の歳月を経ましたが、前編では県内の巨大開発事業がその後どうなったか歴史的に総括するつもりでまとめました。

広域基幹林道の費用対効果の算定のいかがわしさ、足羽川ダムの必要性の検証、福井臨工の借金、法恩寺リゾートから撤退を望む東急。

後編の原発問題についても、ここ20年くらいの間の様々なできごとを、県民の目でふりかえりつつ検証し脱原発の現実的可能性について論及しています。

また、「生き残れない原子力防災計画」-地方政治の現実- という本も、今月中に刊行されます。

チェルノブイリの現状をみながら「福井県原子力防災計画」の中身を検証しています。

また、12年間の地方議員経験をもとに、形骸化した議会の具体的改革案についても提示しています。

書名 福井の山と川と海と原発

著者 山崎隆敏

2010年7月5日 第1版第1刷発行

発行所 株式会社八月書館

定価 1785円(税込み)

書名 生き残れない・原子力防災計画
-地方政治の現実-

著者 山崎隆敏

2010年7月20日 第1版第1刷発行

発行所 株式会社白馬社

定価 1575円(税込み)